

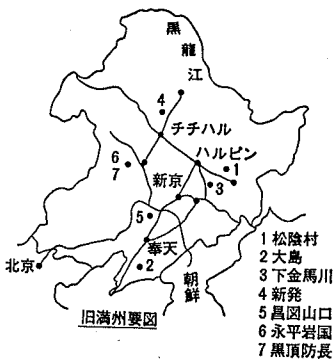
## 山口県出・満州開拓団の記録

小 山 良 昌

### はじめに

昭和七年満州国建国を機会に日本の満州移民は開始された。同一一年には十大国策の一つとして満州開拓民の大量移植計画が立案され、開拓政策の大綱が決定された。すなわち同一二年以降二〇年間に計画的移植を行ない、最終的には全一〇〇万戸、五〇〇万人の開拓民を送り出す計画であった。また一方、同一二年には一般開拓団以外に満蒙開拓青少年義勇軍が結成され、移植政策はいよいよ本格的に推進されることとなった。

この国策にそって、山口県からも昭和一二年結成の昭和松陰開拓団以来七開拓団、九青少年義勇軍が誕生した。「五族協和」「食糧増産」のスローガンのもと、入植団員は第二の故郷を目指して英知を結集し、荒野開拓に力を注いだ。同一六年太平洋戦争勃発、やがて風雲急を告げ始めたにもかかわらず、祖国を遠く離れた満州開拓地では戦勝を信じ希望に満ちた毎日であった。同二〇年八月九日突然のソ連軍の参戦、続いて八月一五日の終戦の報は開拓団員にとって全く青天の霹靂であった。この日を境として開拓団員の苦難の道が始まった。四面楚歌のうちに略奪・暴行に勿論のこと病気・飢餓・襲撃を受けて異国で亡くなった人は数知れない。国策として送り出された開拓団は敗戦によって最大の犠牲をしいられた。戦後三十三年を経た今日、戦後は遠くなった観もある昨今の世相である。しかし現在



もなおこの華かな日本の繁栄の片隅にひっそりと暮している元開拓団員、あるいは帰国の願いも空しく異国の地で望郷の毎日を過している元開拓団関係者の数は決して少なくない。昭和五三年一月現在、中国での生存が確認されている県出身者は六九名にのぼり、その全員が婦人である。

青少年義勇軍については項を改め述べることとし、本稿では山口県出身の一般開拓団(昭和松陰・大島・下金馬川・新発・昌図山口・永平岩国・黒頂防長)を限り、その足跡を紹介することとする。(地名・国名等は当時の名称をそのまま使用した)なお、この機会に、御多忙のなか長時間にわたり調査に協力いただいた岡田登・松本正・藤村景・田畑栄熊・桂哲雄・西村重則・大谷勝良の各氏、貴重な資料の提供をいただいた曾我義夫・尾川謙輔・西村公仁子・村本三郎の各氏に厚く御礼を述べたい。

### 七 開拓団の概要

#### イ 昭和松陰開拓団(松陰村)

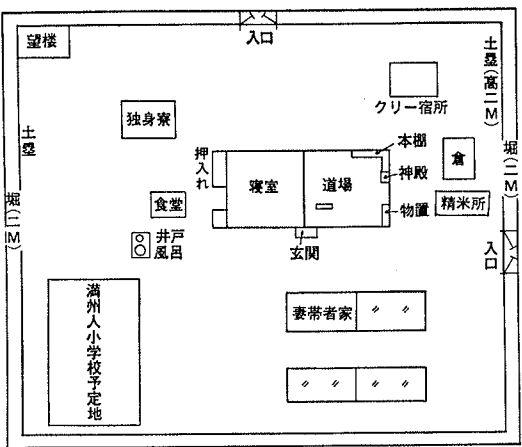
入植先 浜江省葦河県慶陽村平陽川 入植年 昭和一三年四月一日 入団者数約六五名 うち団員四〇名  
幹部団員 団長岡田勇治 副団長曾我正夫 会計曾我義夫

〔団の結成〕 昭和一〇年三月熊毛郡田布施町に「昭和松陰塾」が誕生した。塾は吉田松陰精神の研鑽を目的として、大学を卒業したばかりの中山公威・岡田勇治・岩本六二の三氏が創設したものであった。同一一年秋のこと、同町出

身の岸信介氏が満州国産業部次長として渡満の途次塾に立ち寄られ、塾生に対して「……視野を広げよ、君達の至情を、エネルギーを満州へ注げよ、新天地は君達を待っている……」と力説された。その結果、満州の地に理想郷「松陰村」を樹立することとなった。そして翌年五月には先遣隊六名が先ず渡満し、開拓団弥栄村・千振村などにおいて現地訓練に励んだ。やがて吉林省靠山屯が入植地と決定し、同年一月喜びの入植を果した。ところが入植・踏査の結果現地が入植不適地であることが判明、改めて新入植地の選定が行なわれ、結局浜江省の平陽川と決定した。

〔入植地〕 日本人・満州人・朝鮮人・白系ロシア人が混住するアフロニから約七〇km森林鉄道で北上した所が慶陽村であった。村は東亮子・馱馬の両河に挟まれた三角洲地帯で小石一つない肥沃地であった。かつては原住民部落があり農耕を営んでいたが、満州事変の余波を受けて匪賊が出没し、次第に過疎化して遂には無人地帯となっていた。松陰村の入植により再び満州人・朝鮮人が帰郷して昔日の賑わいとともどしどしつつあった。

〔団の生活〕 松陰村の一日はおよそ次のような日程であった。  
起床―全員点呼―軍人勸諭の唱和―体操―作業(草取り、花壇の手入れ等)―朝食―農作業―昼食―農作業―夕食―入浴―学習(松陰詠歌の朗読、のりととの唱和、和歌の作詩、冥想、読書など)―就床  
特に松陰精神の研鑽という塾の目的により、団長講話、冥想、厳冬下の水こり、松陰門下生命日の祭事など精神生活は厳しいものがあっ



松陰村本部 見取り図

た。入植後村の経営が軌道にのると満州人、朝鮮人が多数小作人として入植してきた。やがて朝鮮人戸数が百戸を越え、それを機会に朝鮮人子弟の学校を建設、同一九年には満州人子弟の学校を建設(予定)など教育面には意を注いだ。同一五年には水田耕作に必要な全長八km余、幅員五mの水路を完成、これ以後水稲作が盛んとなり、米の出荷率は葦河原でも最高、豊かな米作地帯として注目された。農耕は団の飯米程度を自作し、残りの水田を朝鮮人が、畠地を満州人が小作として耕作した。水田小作の朝鮮人約一〇〇戸は一戸当り二・五haを朝鮮式水田耕作で行っていた。村の使用人(クリー)として、大工二人、製材二人、馬使い三人、豚飼い三人、炊事二人、使用人頭一人を常雇していた(参考―曾我義夫著「松陰村開拓団記」(田布施地方史研究) 話者 岡田登氏、曾我義夫氏)

#### 口 大島開拓団

入植先 安東省岫巖県東土城子村

入植年 昭和十五年一月一日 入団者数二八〇名、うち団員五七名

幹部団員 団長・農事指導員松本正 副団長川村幸嘉 書記小林鉄雄 医務指導員治徳操

〔団の結成〕 大島郡屋代村出身者が中心となって現地で組合を編成、のち団へと発展したもので、分村分郷的性格は最初から持たず、団幹部の中には次城県内原開拓訓練所経験者は皆無の状態であった。従って昭和十五年の入植後経営は思わしくなく、次第に経営難となった。その原因として、①水田耕作中心の営農方針をとり、一戸当り平均水田面積五haと広大で労働力不足、経費不足 ②満州での大農法を行なうには経験不足が挙げられた。そこで再建の討議を重ねた結果、従来の組合を解散し、当時北部朝鮮にて一〇〇ha余の農業経営に成功され、組合近くでも三〇ha余の農業経営を行っていた松本正氏を団長に迎えて再建を図ることとなった。氏は一戸平均水田二ha、畠三ha、家畜の飼育多数を目標とし、従来の任意組合を政府補助のある団とする団昇格運動を展開された。

〔入植地〕 山有り谷有り、水量豊富で風光明盾な所であった。また肥沃地で農耕適地でもあった。原住民による水田が広く開けた土地を買収して日本式水田耕作を行なった。県出身の開拓団中では最も南部に位置していたがそれでも冬期の寒さは格別で、零下二、三〇度以下も珍しくなく、川は完全に凍り、凍土は地下一mにも達した。

〔団の生活〕 団の運営は幹部団員の合議制によって行なわれた。入植当初は生活に農耕に苦勞の連続であったが再建後は順調で、特に米の出荷率は高く満州政府から表彰を受けるまでに発展した。畠作にも力を注ぎ野菜も豊富でその外果実(リンゴ、サクランボ)肉類(牛、豚、鶏、川魚)も不足なかった。またリンゴ園の共同経営も行った。冬期の農作業は、地面に大きな穴を掘り家畜の糞を埋め込んでおき、春土中の堆肥を自然醗酵させて良質の肥料とする。土糞、づくりが中心であった。家屋は原住民の家屋を改良したもので、家の外壁はトールピース(土を木ワクで固めたレンガ状のもの)で囲い、屋根は藁で葺いた。屋内の居間は一段と高くして床下にオンドルを通していた。

(参考 異世話課「満州開拓団資料」 話者 松本正氏、押切幸雄(手紙))

#### ハ 下金馬川開拓団

入植先 吉林省舒蘭県金馬村

入植年 昭和十五年一月二八日 入団者数三四七名 うち団員一五六名

幹部団員 団長藤村景 農事指導員香川二郎 經理田村普勤 畜産指導員山崎正男 警備指導員松本徳音 保健指導員阿部高一

〔団の結成〕 団は玖珂郡桑根村の分村として計画された。昭和一〇年当時の桑根村は耕地面積約二八二ha、農家戸数四八六戸、一戸当り耕地面積は僅か五八a。従って当時、くわね村ではなく、くえねえ村とまで称される疲弊村であった。そこで村経済更生委員会が結成され、経済更生の一環として満州で二五〇戸の分村計画が立てられた

これに基き村出身の二三男、系累の少ない者などを主体として和木村、川越村出身者も加え団を結成した。

〔入植地〕 金馬村は原住民の既墾地を満州拓植公社が買収した肥沃地で、入植地としては非常に恵まれていた。昭和一六年五月、団から桑根村宛の手紙によると、入植地の模様を次のように記している。

母村の皆様お褒りありませんか………入植当時は降雪にて幾分寒さを感じましたが、数ヶ月にして天気回復と共に俄かに暖かく、青葉は延々と行く広野に大陸の風を身に受けつゝ元気に農事に従事しています。治安は絶対に不安はなく、夜の警備も火の用心に止めています。……（下略）

〔団の生活〕 前掲手紙によると団の一日の日程はおよそ次のようであった。

午前四時夜明け―五時起床―六時半朝礼―作業開始―一時半作業中止―午後一時半作業開始―七時作業終了―各人自由行動に移る。一日の慰安を求め或は各人所有の空地を利用、目下は春蒔蔬菜や花類の植付けをやっています赤い夕日の満州も既に日没は九時半、十時消灯です。……（下略）

団の運営は部落代表である幹事や幹部を中心とした会議に計って行なった。同一六年五月には幅員三 $m$ 、全長三・七 $km$ 、総工費八二万円かけた水路が完成。これ以後水田面積が増し、一戸当り二 $ha$ 、畠地四 $ha$ を所持し、自作地以外は朝鮮人（水田）満州人（畠地）を小作人として使役し食糧増産に励んだ。農作業の種類は米、大豆、カボチャなど種類は豊富であった。米は飯米以外年一〇〇トン程度の供出を行い、従って生活は相当余裕があった。住居は一世帯一戸、オンドルを備えた木造平屋建てで、建坪およそ九坪であった。風呂、井戸は五戸に一つ宛の共同使用であった小学校は終戦時には児童数一〇三名、開拓団の学校らしく農地約三 $ha$ 、馬二頭、豚一〇余頭、羊八頭を飼育していた。

〔参考〕「満州開拓団資料」 尾川謙輔著「帰ってきた開拓団」 話者 藤村景氏 古屋保郎氏

## 二 新発開拓団

入植先 龍江省甘南県大平山村新発屯 入植年 昭和十五年二月一日 入団者数四〇一名 うち団員一三八名  
幹部団員 団長佐古休一 農事指導員田畑栄熊 經理松田茂雄 畜産指導員松尾嘉市 保健指導員元林時生

部落構成 本部 高根 本郷秋穂 秋中 防長 深須 賀美畑 坂上河山の各部落

〔団の結成〕 玖珂郡北部九カ村のうち桑根村が単独で分村計画を打ち出したことに対し、昭和一三年残り八カ村も連合して山代分郷開拓団結成の方針を樹立した。団幹部候補として佐古休一・田畑栄熊氏が茨城県内原へ、また先遣隊一五名も牟礼農民道場へそれぞれ入所し、入植に備えて訓練に励んだ。同一五年一月入植地決定の通知が届いた。入植先の甘南県はハルピンからさらに一二〇〇 $km$ 北方の地、ソ連国境にも近く、自然環境も厳しく、かつては北滿の流刑地とまで云われた湿地帯であった。この決定にはさすがに団長以下困惑した。既に入植日を同年二月一日の紀元節と決定しており、入植地変更の時間的余裕もないことから入植せざるを得ない状態であった。

〔入植地〕 自然環境の厳しさは格別で、冬期には零下四〇度以下も珍しくなく、寒冷のためにニワトリも卵を生まないとまで云われた。大興安嶺の山麓、見渡す限り荒涼たる地平線、太陽は地平から昇って地平に沈み、丁度海洋中に居る観があった。入植前には主に朝鮮人部落があったが、その土地を買収して入植したもので、入植後三年くらいは治安も悪く匪賊の出没や狼が徘徊するなど危険な地域であって、いわゆる「陸の孤島」であった。

〔団の生活〕 農耕は畠作中心に大豆、小麦、野菜を豊富に生産していた。入植三年目には湿地帯に水田数十 $a$ を開いて水稻試作を行ない、見通しは明るくなっていった。畠地は一畝一〇〇〇 $m$ 、三畝で二〇 $a$ の計算であった。一九年には団の耕地面積は三五〇 $ha$ に達し、特に深須部落では共同経営による大農経営が成功し八〇 $ha$ にも及んでいた。入植時には共同経営を行っていた団も四年目頃から「共同経営、部落経営では働き甲斐がない」との主張が強くな

り、漸次個人経営へと移行していった。生活の安定と共に家族の招致も行なわれて一段と賑いを呈してきた。団の東方には小高い草原があり、そこに「新発神社」を建立し、盛大な秋祭りや大競馬会等催した事もあった。家屋は二戸一棟の平屋建てで、トピーズによって建立した。主食は小麦、マントウが中心で、米は満拓公社から配給を受けていた。祖国を遠く離れた北満の地、しかも自然環境の厳しい土地柄、団員の中にはいわゆる「屯墾病」と称するホームシックに罹り帰国する者が出たことも止むを得ないことであった。

〔参考〕「満州開拓団資料」 田畑栄熊著「引揚者」 話者 田畑栄熊氏

#### ホ 昌図山口開拓団

入植先 四平省昌図県桜桃村 入植年 昭和十六年二月一日 入団者数三八八名

幹部団員 団長桂哲雄 農事指導員玉井敏助 經理藤井晴俊 畜産指導員兼綱菴 健康指導員弘田正登

〔団の結成〕 昭和十三年当時大島郡で僧職の傍社会事業に従事していた桂哲雄氏は、満州への雄飛を志、「山口村建設計画案」なる開拓団設立案を立案、それを携えて直接県、拓務省と折衝し、難行のすえ政府移民としての山口開拓団結成の許可を獲得、県の全面的な協力を得て団員二〇〇戸の開拓団建設を目標すこととなった。桂氏は団結成以前既に団長に任命され、県下全域を対象として団員募集に奔走された。同一五年には牟礼農民道場において集合訓練、渡満後は弥栄村で現地訓練に励み、翌一六年二月一日の紀元節を期して入植を遂げた。なお昌図を入植先として選んだ理由は、小郡町出身で当時昌図県開拓課勤務の小池氏が、昌図の地が開拓地として適地である旨推せんされたことによった。

〔入植地〕 桜桃村は肥沃な南満州平野の中心地、昌図駅から約六〇km、一部に湿地帯がある外は原住民が立派な

農作を行っていた。湿地帯は満州国が国営水田開発として最初に手がけた処で、入植時には基本計画による水路がほぼ完成していた。入植前、原住民が安定した農耕を営んでいた所を国が強制的に買収、立ち除きを強行したことで原住民の激しい反対運動、買収金受取り拒否運動が起った。そして警察官による主謀者逮捕によって農民暴動が勃発し、警官一名が死亡する事件が起きていた。従って入植当初から原住民の反目は強く、また北満から延安にいたる八路军（共産ゲリラ）のルート上にあたっていてその影響も受け易い関係上、原住民対策は慎重に行なった。

〔団の生活〕 入植後二年間は共同経営、三年目から個人経営へと移行した。入植者を一般から公募したこともあって農業経験者が比較的少なく、またいわゆる「屯墾病」に罹る者も多く、団の経営は難渋した。いつしか耕地は雑草が生茂り、開拓団ではなく「アラシ団」とまで自称するまでにいたった。トラクターなど大型農機具も所持していたが日本内地との国情レベルの違いから使用不能となり、いつしか赤錆となって放置されてしまった。そこで内地馬を大量に移入したが気候、風土の違いから罹患率高く倒れるものも数多くあった。しかし個人経営（一戸当り水田三ha、畠地一〇ha所有）へ移行後は漸次改良され、団の経営はようやく軌道にのり始めた。部落は原住民部落を家屋共買収し、改築して団の一部落として使用した。団の運営は部落長（班長）が部落民の意向を持ち寄り、それを基にして団長が決を下すという団長独裁的色彩を多分にもった。共同経営時代には毎朝団本部に集合し、「イヤサカ!!」を行ない、団長訓示のあと仕事に取りかかった。

#### リニョエニ 龍烟大和村

入植先 蒙疆自治圏龍烟沙令子 入植年 昭和十八年

村長 桂哲雄 村民 昌図山口元団員二〇家族、九岡参謀関係七家族 満蒙開拓義勇軍九〇名

太平洋戦争たけなわの昭和一八年三月、全満州開拓団々長会議の席上、桂団長は (1) この太平洋戦争は即時中止すべきである。(2) 戦争を継続するならば満州の守備を強化せよ。そして満鉄輸送網を確保し、開拓団を鉄道沿線に移住しておくべきである。でないとい開拓団はあるいは棄民となることが考えられる。と主張された。この主張が敗戦主義だとして憲兵に逮捕され、即日団長を罷免、団に帰ることも許されず国外追放処分を受けた。幸い関東軍中にもこの主張に共鳴する一派があり、その一人丸岡参謀の手引きによって当時日本の傀儡であった蒙疆自治圏へ潜入することができた。そこでは龍烟鉄鉱所で働く日本人従業員へ食糧野菜を供給する農園の経営を要請された。そこで団の経験を生かして「龍烟大和村」を建設、昌図山口開拓団から二〇家族を入村させ、茨城県内原へ要請して青少年義勇軍九〇名を入村させて村の経営を行なった。(龍烟大和村については公式記録は全くない。開拓団とは直接関係はないものの開拓団から派生した村として山口県に關係することから桂氏の話を要約して記した)

(参考 「満州開拓団資料」 話者 桂哲雄)

へ 永平岩国開拓団

入植先 龍江省洮南県永平村 入植年 昭和一七年七月一日 入団者数二三四名 七九戸

幹部団員 団長長谷川幸次郎↓村本三郎 農事指導員上村勲 經理西村勇 警備指導員藤本寿一

畜産指導員赤岸十蔵 営農指導員中村敏長 保健指導員赤石藤作

〔団の結成〕 昭和一六年頃から商業統制が厳しくなり、小企業を廃し統合して合同化が促進された。そのために岩国市でも多くの商業失業者が生れ社会問題化しつつあった。時あたかも太平洋戦争が勃発、食糧増産、満州での飛躍を目指して満州開拓団建設の機運高揚の中で、岩国市においても満州において、大岩国市、建設を目標とした分市

(村) 計画が立てられ、商業転業者を中心とした職業開拓団が結成されることとなった。この計画は長谷川幸次郎氏西村勇氏、藤本寿一氏ら後の団幹部が中心となって促進され、同一七年五月先遣隊四五名がまず渡満、七月一日喜びの入植を果した。

〔入植地〕 永平村は白城子駅からさらに蒙古方面へ北上、鎮西駅で下車三〇km余の地であった。かつては蒙古人の居住地で、入植当時には満州人、蒙古人の居住地となっていた。所々に背丈の低い灌木が見える以外は見渡す限り荒涼たる草原地帯であった。春先きにはいわゆる蒙古風が砂塵を巻き上げて吹き荒れ、その砂塵によって、赤い夕日、はますます赤く美しいものであった。春になると草原一面に一斉に草花が咲き乱れ、それも三日く五日を周期として次はタンポポが、次いでスマレが見渡す限り次々と咲き競い、そしていつしか急ピッチで夏が訪れていた。入植当初は治安も悪く馬賊、狼などに悩まされた。しかも原住民とは言語上の障害により意志の疎通を欠き、そのため流言飛語に脅かされ、戦々恐々たる有様であった。

〔団の生活〕 団の一日の日程はおよそ次のようであった。

朝五時起床―朝食―農作業―一時昼休―昼食―午後三時農作業―八時日没と共に終了―夕食

冬期には次年の団建設の為の作業、米肥料日用雑貨など生活物資の運搬、大工仕事など行なった。農耕は畝作中心であった。水田は入植一年目に約三〇haばかりを開くため水路建設を行なったが、降水量不足、水路工事の不手際などにより必要水量が確保できず、結局二年目からは中止を余儀なくされた。農作物はバレイシヨ、トウモロコシなど中心に野菜は豊富であった。畠地は将来一戸当り一六haの所持を目標とし、入植後二年間は共同経営、三年目からは早く入植した者は個人経営へと移行した。また入植後アルカリ性の満州の水が合わぬこともあって、生水を飲んでは原住地特有の風土病、アミバー赤痢に罹る者も多く、医療設備の不完全さと相まって沢山の病人が発生し、団員、

子供がそれぞれ三名死亡した。また匪賊・狼・流言・自然環境の厳しさに加え祖国を遠く離れて心情不安定となり、屯墾病も多く発生し、総数の二割の者は帰国してしまった。

(参考) 「満州開拓団資料」

話者 西村重則氏、村本三郎氏)

(b) 黒頂防長開拓団

入植先 龍江省洮南県永平村

入植年 昭和一八年六月一日 入団者数一三〇名 うち団員四六名

幹部団員 団長森田親光 農事指導員大谷勝良 経理杉山安積 医務指導員浅沼嘉一

〔団の結成〕 満州開拓を推進する運動の一環として県農事報國推進隊が結成されていたが、昭和一六年上関町長の推せんにより同町出身の大谷勝良氏はこれに入隊、県選出団として内原開拓訓練所に入所、二ヶ月の訓練を受けた。一方後の団長森田親光氏は開拓団の後統部隊募集にあたり農事報國隊員中から入選、後の幹部大谷氏や杉山氏を勧誘、両氏らの積極的な団員募集により上関町、下関市出身者を中心に団が結成された。

〔入植地〕 永平岩国団と同じく鎮西駅下車し、そこからおよそ三六kmも離れた不便の地で、岩国開拓団とは小高い一〇〇mほどの丘を境にして隣り合っていた。春の蒙古風は激しく、入植する家族は頭からすっぽりと毛布を被っていても、それでも黄塵で顔は真黒という状態であった。黒頂の名前の由来は、近くに黒頂と称する真黒い岩山(石炭山)がありその岩山の名称を付けたものであった。永平岩国開拓団がやや湿潤地であるのに対し当地は比較的湿潤地は少なく、従って畠作中心であった。冬期には空気が非常に乾燥していて喉部を痛め易く、外出には必ずマスク、ネッカチーフで顔部を覆う必要があった。水と木材は乏しく貴重品であった。

〔団の生活〕 農耕は畠作中心であった。水田耕作は岩国開拓団が試作したところ風土病が発生したと伝聞、その

ため当団では全く手を着けなかった。原住民(満漢蒙人各半)が畠作に家畜を飼育する経営であったことから当団もそれを踏襲、北海道農法を採用した。この畠作は五年を周期とする輪作で、耕地を五区分し、一年目土糞を施した区域にトウモロコシ・玉ねぎを植え、二年目には大豆・コウリヤン、三年目に粟、四年目にソバ、ヒエを植え、そして五年目に再び土糞を施入し、植付けをくり返した。この土糞は家畜の堆肥で、家畜は所有畠地に応じた頭数が必要であった。一戸当り平均畠地は一五シヤン(一シヤン七反三畝)、森林二シヤンであった。作物の作柄は大変良く、県品評会に出品しても大半の賞は当団が獲得、入植年数が浅いにもかかわらず優秀であるという評価を得ていた。団の生活が安定すると共同経営から同一九年には組経営に、さらに二〇年には個人経営へと移行していった。日常生活で最も意を注いだものは水で、朝食のとき汁で顔を洗い、その水を豚牛など家畜の飼料に混入するなど再利用を重ね節水を行った。原住民対策は「五族協和」をモットーに接し、団民と原住民間には非常に友好的であった。引揚げに際して多くの原住民が団を訪ね、百目ローソク、マントウなどの餞別を贈られ、慌しい中にも離別を惜しんでくれた。

(参考) 「満州開拓団資料」

話者 大谷勝良氏)

ソ連軍の参戦・終戦

昭和二〇年八月太平洋戦争は既に終局を迎えようとしていた。同八月九日ソ連は突然日ソ中立条約を破棄し、ソ連国境を突破して満州へ南下を開始した。無敵を称した我が関東軍の主力は既になく、開拓団の中心となる男子も出征につぐ出征でその戦力は極端に低下の状態にあった。相つぐソ連軍・匪賊・土匪の襲撃を受けて殺害、略奪、暴行の限りを恣にされ、開拓団の受難が始まった。七開拓団のうち最も悲惨な状態で多くの犠牲者を出した黒頂防長開拓団

について、当時の状況を記そう。団は引揚途中ソ連戦車隊と遭遇し、多くの犠牲者を出したものである。

## 「ソ連戦車の襲撃事件」

（「満州開拓団資料」より）

- 1 昭和二〇年八月一〇日、ソ軍侵入の情報に接し、本部は直に引揚準備を指示した。
  - 2 指示により準備を完了、集結した本部々落四六名と黒頂部落八名が先発隊（以下第一隊と云う）となり、八月一日午前一時頃大車に婦女子を乗せ鎮西に向けて出発した。遅れて集結した黒頂部落二三名、万発保部落一九名は午前三時頃第一隊の後を追って出発した。
  - 3 同日午後二時頃鎮西に到着した第一隊は鉄道不通なるを知り、洮南（鉄道幹線沿い）に向うべく決意して翌二日昼頃県公署に連絡したところ、鎮西に留まるよう指示があったが刻々と迫る不安から「同団は洮南に向う」旨返事をなし、同日午後四時頃瓦房鎮へと引返した。
  - 4 瓦房鎮に引返した第一隊は後発の第二隊がすでに洮南に向ったと聞き、引続き洮南に向け出発した。
  - 5 苦難の行程も終りに近ずき、八月一三日午後洮南の西南約二〇kmの順徳村近郊の平野にさしかかった際、突如横方に戦車隊を望見、一同は「日本軍だ！」と日章旗を打ち振り歓呼したところ、戦車隊も応ずるが如く一たん停車、横隊となり近づくを見れば、なんとソ連戦車隊であった。
  - 6 急転直下の変貌に呆然たる団員の群に対し、彼れは包圍隊形を整え轟然たる音と共に発砲した。男子は警備銃を以て戦車を喰いとめんと応戦をなし、ここに彼我の戦斗は開始された。
  - 7 団員五〇数名、然も半数以上は婦女子、無防備に等しい。僅かの警備銃と戦車隊では竜車に向う蟻螂の如し、地獄絵図そのままの中に脱出者一名を除く全員が砂埃を鮮血に染め、遂に壮絶なる最後をとげた。
- この報告書は当時団の医者であったA氏の証言を基に作成されたものである。続いてA氏は当時の状況を別項で

団員及家族続々と戦死なす。其時吾妻も身体に数発の敵弾を受け苦悶なす。その悲痛なる姿を見るに耐えざれば軍刀にて殺したり。この情況にてはいかんとするすべもなければ自決するにしかずと覚悟を定め軍刀を腹につきさす人事不省数十時間経過後、蘇生なして周囲を見れば僥倖か原住民に救助されていたり……（略）……其の時の酷烈なる状況はかのガダルカナルの皇軍の全滅もかくの如き状況ならん。（A氏はその後負傷が原因で新京にて死亡）

一方後統第二隊も順徳村で土匪に襲われ、多くの犠牲者を出して隊は崩壊してしまつた。

その後、日中間の国交再開により、戦死者に救えられていた同団員六名が奇跡的にも中国の地に生存していることが判明した。親の見舞を理由に一時帰国されたそのうちの一人長谷コトさんは、ソ連戦車遭遇当時の状況を次のように語っている。（大谷勝良氏確認・談）

私（長谷）はソ連戦車の襲撃を受けて負傷しました。戦車が去つたあとしばらくして、医者の方Aさんは生存者に対して「ロシア人や満州人に生き恥をさらすよりは全員自決せよ、自決できない者はおれがやってやる」と云われ、生存者はつきつぎに刀を受けました。私は左胸を切られて気を失いました。ふと気が付き、胸の切り口を見るとハエが真黒に止っていました。そばの地面に黒い水溜りがあったので何気なくその水を傷口に塗つたところ、ハエが止まらなくなつた。（黒い水とは戦車の廃油か―大谷氏）そのうち親切な満州人に助け出され生きのびました。

また、極く最近一時帰国された当時一才の原田育子さんも、背中の右肩から左肩にかけて大きな刀傷があり、やはり「半狂乱となつていた医者に切られた」と大谷氏に証言されている。

襲撃後の阿修羅場において、妻や団友の苦悶を目の前にして絶望と責任感の交錯するなかで、人命の救助をその職務とする医者が生存者に対して自決をすすめ、自らの手で同胞を殺める行為を敢えて行なつた。そこに黒頂防長開拓団の、いや日本の悲劇があつた。



八月一五日、日本はポツダム宣言受諾を發表し、無条件降伏した。しかしこれで開拓団の受難が終った訳ではなかった。

新発開拓団では終戦以来の半年間に受けた襲撃回数はソ連兵六回、匪賊一二回、土匪二〇回を数え、団長以下三名の犠牲者を出した。団としてもこのまま留まっていたら生命の安全を保つことはできないと判断し、翌年三月一日を期してチチハルへの脱出を決定した。寒気と飢餓のうえ老幼婦女を抱えての脱出は難渋を極めた。ハルピン迄の途時の死亡者二九名、チチハルの収容所でも疲労と食糧不足、そのうえ所内で発疹チフスが蔓延し七八名の死亡者、チチハルから帰国までの間にも八名、以上総計一一五名の犠牲者が出る有様であった。

入植地を引揚げやと避難民集結所に入所してのちも、翌日から生活の糧を得る為の過酷な労働が待っていた。人々の心は荒れはて、そして生活は次第に苦しく、遂には死への誘惑に勝てず自らの命を絶つ人の群れも……。

永平岩国開拓団の西村公仁子氏筆「地獄の満州よさようなら」(開拓珠宝)によると

家計の生計のため盗みを働く少女、金で買われていく婦人、生活のために子供を売る者までも……そして遂には極寒の為、飢えの為、帰国の願いも空しく死んでいく者、毎日夕刻になると死者を積んだダーチャの行列が二十台、三十台と続き、その行列の行先は氷結した大河の中でした。……私も着るものとしてなく食糧にも事欠くし「死」を決心したのです。「可愛そうだけれど長男栄二も道づれにしよう……」と、その日はすばらしく美しい銀世界でした。白紙でこよりをより、数珠をつくりそれを長男の小さな手くびにかけてやり官舎の門を出て行きました。目的地の松花江に着いた時は既に十四五人の死の希望者が立並んでいました。誰が掘ったか氷の穴がポツカリと開いているのです。前の人が次々と穴に飛び込み消えてゆきました。今度はいよいよ待っていた番が来たのです。ようし子供から先にと栄二を強く抱きかかえると『お母ちゃん僕はいらんよう!!お父ちゃんとかかえるん

よう!! バカバカ!!』と声を限り泣きさげび…… 手間取っては後の人達に迷惑をかけるので次の人に順番をゆずりました。次の腰の曲ったお婆さんは「南無阿弥陀仏……」とお念仏を称えながら両足を入れた、と思うとたん姿は見え、厚い氷の下には清流がサラサラ流れているばかりです。この穴の中には幾百人幾千人もの人達が……

いつ帰国できるとも知れない絶望の毎日、肉親との生別・死別、極寒の中生活との苦闘に疲れ果てて死を覚悟する者が続出したとしても……。誰人もそれを咎めることはできない。永平岩国開拓団では七五人の犠牲者があった。

以上のように、大半の団において帰国までに多くの犠牲者を出しているのに対し、下金馬川開拓団のように団長以下一致団結して困難を切り抜け、奇跡的にもほぼ全員が帰国を果たした団もあった。

(参考 「満州開拓団資料」)

## おわりに

沖縄返還にあたって時の総理大臣は「沖縄返還が終らなければ日本の戦後は終らない」と発言された。その沖縄返還が実現した今、「日本の戦後は終った」と断言できるであろうか。

終戦の年の三月末、渡満された当時一四才の国広恵保さんは、現在の心境を次のように述べている。

父は亡くなり、母は現在病床にてはつきり返事をしかねますが……。政事の事は全くわからなかった父だが終戦が八月と云うのに財産、生命、家庭を御国のためとは云へ又政さくとは云へ未前にふせげなかったかと考える。国がしうれいして行かせたの、もすこし国としても考へてほしい。二〇年三月渡満、八月終戦、だれが考へてもあ

まりにもむごい人生のひとつまと考え居ります……………

（原文手紙まま）

元黒頂防長開拓団の中国生存者の一人は、六ヶ月間の一時帰国のうち、再び日本を離れる際羽田空港から電話をかけて、「日本を離れたくない／＼中国にはもう帰りたくない！！」と悲痛な声で泣きだし、それを「あなたが帰らなければ皆が困るんだよ」となだめすかして無事中国へ帰国させる元同開拓団の団員の心情はいかばかりであったことか。

最後に先述した原田育子さんの手紙を紹介しよう。彼女は戦後三十二年間中国で育てられ、その間母国（日本）語は完全に忘れてしまった。しかし六ヶ月間の一時帰国中に一所懸命母国語の勉強をされた。その成果が次の手紙である。たどたどしいその日本字には原田さんの気迫が感ぜられた。

大谷さんお手紙ありがとうございます。お正月あげておめでとうございます。いま元気ですか。私しわ三月に中国に帰ります。いま私し母子二人元気です。安心して下さい。私しわいま日本のことばすこうしわかりました。しかし全部いけません。私しわ中国帰ていたら手紙を出していきます。では大谷さん身体で生活して下さい。ではさようなら

原田育子

（原文のまま 昭和五十三年一月二十九日付）